

農具は25点が出土しており、鍬・鋤・柄・杵・大足・ねずみ返しがある。同定の結果、針葉樹3分類（5点）、広葉樹5分類（20点）が検出された。

鍬は6点が出土しており広葉樹2分類が検出された。内訳はアカガシ亜属（5点）、イスノキ（1点）である。第107図2は平鍬、第107図4は股鍬と形態に差異はあるが樹種はアカガシ亜属と同一である。第115図16のみイスノキであるが、資料の残存状況が良好ではなく鍬と確定するには不十分な点もあるため別の器種の可能性も考えられる。鍬は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土しており、樹種はモミ属である。III-C区出土の鍬は未製品であるため他の農具または別の器種の可能性も考えられる。

鋤は3点が出土しており全て広葉樹のアカガシ亜属である。上述する鍬と同様、アカガシ亜属の使用率が高い。第93図3は残存状況が良好でなく鍬か鋤を区別することは困難であるが、ここでは鋤として分類した。第91図1は鋤未製品である。鋤は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも鋤未製品が1点出土しており、樹種はアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアラカシ・シラカシ・イチイガシなど複数種があるが、組織構造のみではこれらを区別することはできない。強靭なアカガシ亜属は鍬や鋤など農具の樹種として一般的であり出土例も多い。

杵は2点が出土しており全て広葉樹のツバキ属である。出土点数が少ないためここでは同定結果を示すに留める。延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも4点が出土しており、樹種はスギ（1点）、アカガシ亜属（2点）、ツバキ属（1点）である。

大足は5点が出土しており針葉樹2分類が検出された。内訳はヒノキ（2点）、スギ（3点）である。第106図10・11は同一個体の可能性があり、樹種はいずれもスギである。大足は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土しており、樹種はモミ属である。延永ヤヨミ園遺跡III・IV-C区から出土した大足はいずれも針葉樹が使用されている。

柄は3点が出土しており全て広葉樹である。内訳はアカガシ亜属（2点）、環孔材（1点）である。柄は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土しており、樹種はスギである。延永ヤヨミ園遺跡III・IV-C区から出土したいずれの柄もどのような器種の農具であったかは不明である。

ねずみ返しは5点が出土しており全て広葉樹のクスノキ科である。第114図1・2は同一個体である。ねずみ返しは延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土しており、樹種はクスノキ科である。

工具

工具は10点が出土しており、槌・砧・楔・羽子板状木製品などがある。同定の結果、針葉樹1分類（2点）、広葉樹5分類（7点）が検出された。なお未同定資料が1点ある。

木槌は1点が出土しており広葉樹のクスノキ科である。木槌が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I～V区においてIV-C区の1点のみである。

砧は4点が出土しており広葉樹4種が検出された。内訳はクスノキ科（1点）、ツバキ属（1点）、イスノキ（1点）、サカキ（1点）である。出土した4点全てが広葉樹であるがいずれも異なる樹種が使用されている。砧が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I～V区においてIV-C区の4点のみである。

楔は2点が出土しており全て広葉樹のアカガシ亜属である。楔は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも3点が出土しており、樹種はヒノキ（1点）、スギ（1点）、アカガシ亜属（1点）である。

羽子板状木製品は1点が出土しており針葉樹のヒノキである。羽子板状木製品は延永ヤヨミ園遺

跡Ⅲ-C 区からも 1 点が出土しており、樹種はシイ属（1 点）である。

その他、栓として 1 点が出土しており針葉樹のヒノキである。

紡織具

紡織具は 25 点が出土しており、糸巻・編錘・腰当がある。中でも編錘は 24 点と比較的まとまつて出土している。同定の結果、針葉樹 2 分類（2 点）、広葉樹分類（24 点）が検出された。紡織具の広葉樹は全て編錘である。

糸巻は 1 点が出土しており針葉樹のヒノキである。糸巻が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡 I～V 区においてⅢ-C 区の 1 点のみである。細長い板状を呈する形状から割裂の容易な針葉樹のヒノキが利用されたと考えられる。

編錘は 24 点が出土しており全て広葉樹である。内訳はアカガシ亜属（2 点）、散孔材（15 点）、ケヤキ（2 点）、スギ（1 点）、ツバキ属（1 点）、未同定（2 点）である。形態差による樹種の偏りは見られないようである。編錘は延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-C 区からも 9 点が出土しており全て広葉樹である。腰当は 1 点が出土しており針葉樹のモミ属である。腰当は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区からも 3 点出土しており、樹種はスギ（1 点）、ヒノキ（2 点）である。

武具・馬具

武具・馬具は 7 点が出土しており、鞍・鎧・盾・弭がある。同定の結果、針葉樹 2 分類（2 点）、広葉樹 5 分類（5 点）が検出された。

鞍は 4 点が出土しており針葉樹 1 種、広葉樹 3 種が検出された内訳はカヤ（1 点）、コナラ節（1 点）、ニレ属（1 点）、クスノキ科（1 点）である。点数は少ないが、鞍に使用された樹種は、広葉樹の使用率が高くなる様子が伺える。一方、全て異なる樹種が使用されており特定の樹種に偏る傾向は見られない。鞍は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区からも 2 点が出土しており、樹種はアカガシ亜属（1 点）、キブシ（1 点）である。鞍は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区・Ⅳ-C 区を合わせても 4 点と出土点数が少なく、詳細な用材傾向を示すには至らないが、広葉樹の使用率が高く全て異なる樹種であることから多様な樹種の使用が見られる。樹種の多様性については、鞍の形態差によるものか時期差によるものかは本稿の同定結果のみでは詳細は不明である。

鎧は 1 点が出土しており広葉樹のニシシギ属である。鎧は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区からも 2 点が出土しており、樹種はケヤキ（1 点）とツブライ（1 点）である。鎧は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区・Ⅳ-C 区を合わせても 3 点と出土点数が少ないと、上述する鞍と同様に詳細な用材傾向を示すには至らないが、全て広葉樹でありいずれも異なる樹種が使用されている。

盾は 1 点が出土しており針葉樹のモミ属である。盾が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡 I～V 区においてⅣ-C 区の 1 点のみである。

弭は 1 点が出土しており広葉樹のアカガシ亜属である。弭が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡 I～V 区においてⅣ-C 区の 1 点のみである。

祭祀具

祭祀具は 18 点が出土しており、形代（人形・馬形・刀形・舟形）・燃えさしなどがある。中でも形代は 10 点と比較的まとまつた点数が出土している。同定の結果、針葉樹 4 分類（15 点）、広葉樹 2 分類（2 点）が検出された。

形代は 10 点が出土しており針葉樹 2 種、広葉樹 1 種が検出された。内訳はヒノキ（7 点）、スギ

(1点)、アカガシ亜属(1点)である。形代に使用された樹種は1点を除き全て針葉樹である。薄い板状を呈する形状から加工の容易な針葉樹の使用率が高いものと推測される。なお、人形(第112図7)は資料の形状保護を優先して切片採取を行わず未同定とした。目視により木目の状態などを観察した結果では針葉樹と推測される。この他、形代を形態毎に分類すると、人形(スギ2点・アカガシ亜属1点)、馬形(ヒノキ2点・スギ1点)、刀形(1点)、舟形(ヒノキ1点)となる。形態毎の用材傾向を示すには点数が少ないが、同定結果からはヒノキとスギがほぼ同数使用されている。形代は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも4点が出土しており、樹種は全て針葉樹でヒノキ(2点)、スギ(1点)、ヒノキ科(1点)である。

燃えさしは5点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ科(3点)、マツ属複維管束亜属(1点)、針葉樹(1点)である。第112図1は資料の劣化が著しく、樹種同定に必要な全ての面において切片採取が困難であった。同資料については資料の保護を優先して採取可能な面のみで切片採取を行い、同定は広義のものに留めた。燃えさしは延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも2点が出土しており、全て針葉樹で樹種はスギ(1点)、ヒノキ科(1点)である。

その他、祭祀具には上記の他に槍形木製品・棒状木製品・結界杭が出土している。槍形木製品(第112図15)は1点が出土しており樹種は広葉樹の散孔材である。槍形木製品は形代とも考えられるが詳細は不明である。形代(第112図16)は1点が出土しており樹種は針葉樹のヒノキである。上述する槍形木製品と同様、形代と考えられるがこちらも詳細は不明である。第88図2は結界杭と考えられている資料で、樹種は針葉樹のヒノキ科である。結界杭が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I~V区においてIV-C区の1点のみである。

文房具

文房具は12点が出土しており、木筒と荷札である。同定の結果、針葉樹2分類(6点)が検出された。墨痕が確認されたものに関しては木筒、その他については札として区分している。木筒のうち文字の判別が可能な墨痕が確認された8点について、資料の形状保護を優先して切片採取による樹種同定を行っていない。

木筒・札は9点が出土しておりこのうち樹種同定を行った資料は4点である。内訳は全て針葉樹のヒノキ(4点)である。また資料の形状保護のため未同定とした資料は、目視により木目の状態などを観察した結果では全て針葉樹と推測される。木筒は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも8点が出土している。IV-C区と同様、資料の形状保護を優先するため樹種同定を行った資料は1点のみである。樹種は針葉樹のヒノキ科である。

荷札は2点が出土しており針葉樹1種が検出された。内訳はスギ(2点)である。荷札は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土しており、樹種は針葉樹のヒノキ科である。上述する木筒同様、点数が少なく同定結果を示すに留めるが、使用された樹種はいずれも針葉樹である。

部材

部材は52点が出土しており、杭・扉・梯子・井戸枠・その他(部材・台状木製品)がある。同定の結果、針葉樹5分類(37点)、広葉樹7分類(14点)が検出された。部材のうち井戸枠(第103図1)は未同定である。

杭は4点が出土しており針葉樹1種、広葉樹3種が検出された。内訳はカヤ(1点)、クヌギ節(1点)、散孔材(2点)である。杭は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも5点が出土しており、樹種

は全て広葉樹でアカガシ亜属（1点）、散孔材（3点）、ミカン科（1点）である。

扉は1点が出土しており針葉樹のスギである。扉は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも2点が出土しており、樹種はスギ（1点）、モミ属（1点）である。扉は延永ヤヨミ園遺跡III-C区・IV-C区を合わせても3点と出土点数が少ないため、詳細な用材傾向を示すには至らないが、スギ（2点）、モミ属（1点）と全て針葉樹が使用されている。

梯子は1点が出土しており広葉樹のアカガシ亜属である。梯子は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも2点が出土しており、樹種はスギ（1点）、マツ属（1点）である。

井戸枠は38点が出土しており針葉樹1種、広葉樹2種が検出された。内訳はモミ属（30点）、シイ属（3点）、クスノキ科（4点）である。なお、第103図1の資料は未同定である。1号井戸ではモミ属の使用率が圧倒的に高く、一部、広葉樹が確認できる。井戸枠は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも3点が出土しており、樹種はスギ（2点）、ヒノキ科（1点）である。IV-C区1号井戸と比べ出土点数は非常に少ないが、こちらではスギの使用率が高い様子が伺える。井戸枠が出土した井戸跡はIII-C区・IV-C区共に1箇所のみであるが、井戸枠にはスギやモミ属など針葉樹の使用率が高い傾向が伺える。

その他の部材は6点が出土しており、針葉樹3種、広葉樹2種が検出された。内訳はヒノキ（2点）、スギ（1点）、マツ属複維管束アラ属（1点）、散孔材（1点）である。第114図3は台状製品と考えられる資料で樹種はハイノキ属である。

運搬具

運搬具は1点が出土しており輦である。同定の結果、針葉樹1分類（1点）が検出された。

輦は1点が出土しており針葉樹のスギである。輦が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I～V区においてIV-C区の1点のみである。

その他

延永ヤヨミ園遺跡IV-C区からは上記した器種以外にも、板状器具材（63点）、棒状器具材（22点）、用途不明木製品（2点）が出土している。これらは未だ用途が不明なものが多いことから、本稿では同定結果を第7表に示すに留める（小林）。

【参考文献】

島地謙・伊東隆夫1982『国説木材組織』 地球社

伊東隆夫1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫・山田昌久2012『木の考古学 出土木材データベース』 海青社



文中写真21 IV-B・C区現況写真



文中写真22 本遺跡の現状（北から）

8 延永ヤヨミ園遺跡IV区の調査成果のまとめ

今調査区における時期的な変遷や特徴的な遺構・遺物についての検討は前節までに行った。本書のまとめとなる本節では、前節まで考察したIV区の調査成果をまとめるとともに、東九州道や県道調査区での調査成果を含めて、現時点までで明らかになった本遺跡の位置づけを中心に記述したい。

まず本調査区での最も重要な成果は、『類聚三代格』に記された「草野津」比定の根拠となる木簡・墨書き土器がIV-C区包含層から発見され、本遺跡が「草野津」と決定できることである。

これまで本遺跡では6世紀末まで竪穴住居を中心とする大規模な集落が営まれていたが、7世紀前半になると急激に集落規模が縮小し、この時期以降基本的に竪穴住居は造られなくなる。かわって7世紀中頃～後半になると北側丘陵のV-1、II-2区において官衙的配置の大型掘立柱建物群が検出されている。また今年度報告であるが、北側丘陵先端にあたるIII-A・B区でも大型掘立柱建物跡が確認されている。先のV-1、II-2区で検出された建物群は、主軸の違いと建物同士の近接関係から2時期にわたることが想定され、7世紀中頃～末に存続した建物群であると考えられる。このV-1、II-2区の建物群南側には、7世紀末～8世紀前半のL字形に屈折した溝も存在するが、内部施設は未検出で、時期も下ることから報告者は別の構造物を構成したのではないかと指摘する。

この他当該期の検出遺構は、中央部と南側の谷部と丘陵上を繋ぐように丘陵を巡る道路状遺構が存在し、このうちIV-A・B区の道路状遺構は7世紀末～8世紀には確実に機能し、10世紀まで機能していた可能性が高い。またIII-C区では7～8世紀に属すると考えられる、杭が多数打ち込まれた船着場の可能性がある溝、IV-C区では船着場の可能性がある低地部に突き出す平場が確認されている。

さらに、IV-C区包含層から9世紀前半の「津」銘墨書き土器、III-C区の包含層からは「京都郡不知山里（諫山郷）」の荷札木簡、III-C区1号戸井戸から京都郡大領を意味する「京都大」銘墨書き土器（8世紀後半）、II-1区8号土坑（井戸）から京都郡物部大領を意味する「京都物太」（8世紀前半）、IV-C区包含層から「京都郡鎮」の指揮官である「小長」を意味する郡符木簡と「天平六年（734）年」銘の荷札木簡などの文字資料が発見された。

以上のことから、本遺跡が少なくとも7世紀後半～8世紀にかけて京都郡衙関連施設として機能し、この施設は「大領」を意味する墨書き土器の存在から京都郡長官である大領が執務することもあった施設が存在したことが想定される。さらにこの施設は、9世紀前半の「津」銘墨書き土器から『類聚三代格』に記された「草野津」であることがほぼ決定づけられたといってよい。

しかし、「類聚三代格」から、「公私の船」が「意に任せて往還」したとされるこの「草野津」は、北側丘陵東側に大型建物群が集約されることから、北側丘陵東側に「草野津」管理施設・機能が存在すると想定されるが、当該期のおそらく総柱の掘立柱建物群で構成されたと推測される津の機能として必要不可欠な倉庫群は未検出である。

津の港湾施設がIII-C区及びIV-C区に存在した可能性を先に指摘したが、そこから丘陵に向かう道路状遺構は、倉庫群と港湾施設とを結んだ道路と推測され、倉庫群はV区西の北側丘陵西側及びIV-A・B区の道路状遺構が東側に屈折することからI・IV-A区東側の南側丘陵東側という2ヶ所の倉庫域の可能性を指摘しておきたい。またおそらく南側丘陵の倉庫域の方が道路状遺構の規模とIV-C区出土遺物の内容からより大規模であったと思われる。

遺跡南東4kmには、近年発見された8世紀前半段階の豊前国府と考えられる福原長者原遺跡が存在する。この「草野津」の管轄は豊前国司であったと考えられ、官道などのアクセス道路も含めた本遺跡と福原長者原遺跡との関係を今後検討する必要がある。今後の調査の進展に期待したい。

次に前段階である古墳時代後期の本遺跡は、堅穴住居が丘陵の至るところに密集することが判明した。東九州道、国道201号、県道部分の調査区内でも古墳時代後期に属する堅穴住居は500棟以上あり、丘陵上及び斜面は削平が顯著と考えられることから、1000棟近く存在した可能性がある。

本調査区は斜面及び谷部に位置し、検出された堅穴住居は少なかったものの、堅穴住居の建替関係を予想させるセット関係、カマド祭祀及び堅穴住居内使用方法の推定など、密集度が低いからこそ、堅穴住居の情報をより多く得ることができた。今年度末に同時に刊行される4冊の報告書を含めて、これらの様相が本遺跡でどのように普遍化されるのか否かが期待されるところである。

またIV-C区の包含層から未製品を含む多量の木製品が出土した。包含層から出土した木製品は、形態と出土土器の時期別割合から、多くが古墳時代後期～古代に属すると考えられる。木製品は農具のほか、複数の木製鞍や壺鏡の未製品、衣笠や下駄などの服飾具、編錘を中心とする紡織具、容器類のほか、簀串や形代などの祭祀具、先述した木簡類などの文房具、井戸枠などが出土した。木製鞍のうち1点は黒漆が塗布され、衣笠などの存在から、7世紀以前の古墳時代後期にも本遺跡周辺に地域首長が存在した可能性を示すものとして注目される。III-C区から古墳時代後期の準構造船堅板が出土していることもあわせて考えると、本遺跡は古墳時代後期には地域首長の支配する「津」の機能をすでに有していた可能性があるであろう。

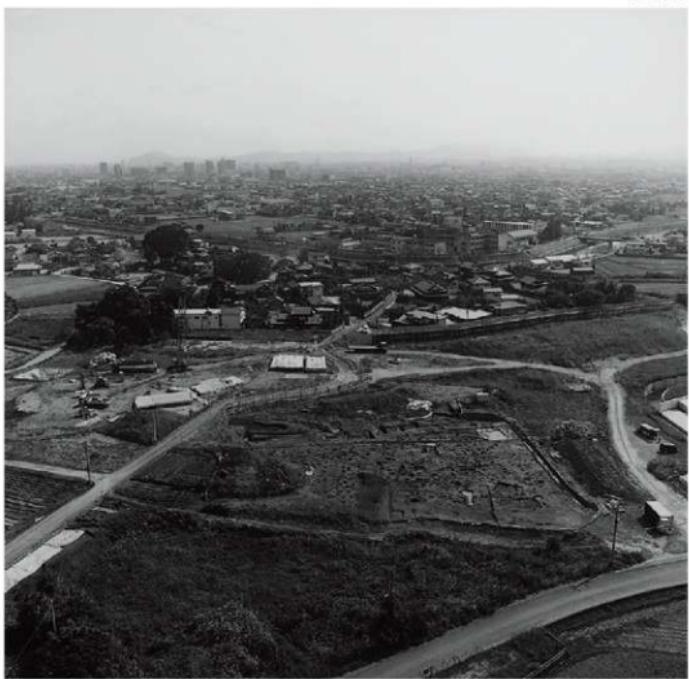
さらに弥生時代後期～古墳時代前期も本遺跡の盛期の一つであるが、古墳時代後期と同様、当区の堅穴住居は少ない。その中で西部瀬戸内系器台が出土したことは本遺跡の交流拠点としての在り方を示すものとして重要であるが、出土土器のうち外来系が多く占める弥生時代後期中期の行橋市辻垣遺跡群等とは対照的に、本遺跡では河川に面していること、多くの堅穴住居が造られるわりには瀬戸内系や畿内系など外来系土器の出土が非常に少ない。このことは本章2の堅穴住居の分析から、本地域は從来北部九州における瀬戸内地域との窓口として外来系要素を早く受容すると考えられてきたが、2本主柱やベッド状造構を持つ堅穴住居が古墳時代中期まで存続することなど古墳時代前期～中期にも在地系規制が強いことが明らかになった。近年、みやこ町京ヶ辻遺跡で古墳時代中期前半のオンドル状煙道を持つ堅穴住居群、みやこ町居屋敷1号窯の初期須恵器が出土している。これらは、今年度末に報告書が刊行されることから、5世紀の渡来系文化の受容に際して、本地域の動向を改めて検討する必要があるだろう。

中世では、本遺跡では多くの区画溝及び多数の柱穴が検出され、13世紀前後を中心とする輸入陶磁器の存在から、本地域の比較的上位階層が居住した集落として今後分析が必要である。

以上、今後の課題を主に記述した「まとめ」になったが、今年度末に本遺跡の報告書がすべて刊行されることで、古墳時代初頭前後、古墳時代後期、古代等の本地域の歴史に大きな影響を与える調査成果が全て公表される。出土遺物量や整理スケジュール、調査担当者等の関係で、調査区ごとにまとめるという報告書になってしまい、遺跡の全容解明という意味ではいずれの報告書でも十分な検討ができなかった。

本遺跡の各報告書で指摘した検討課題について、今後機会を改めて検討する機会を持ち、調査担当者としての責務を果たしていただきたい（大庭）。

図 版



1 IV-B 区全景
(空中写真、西から)

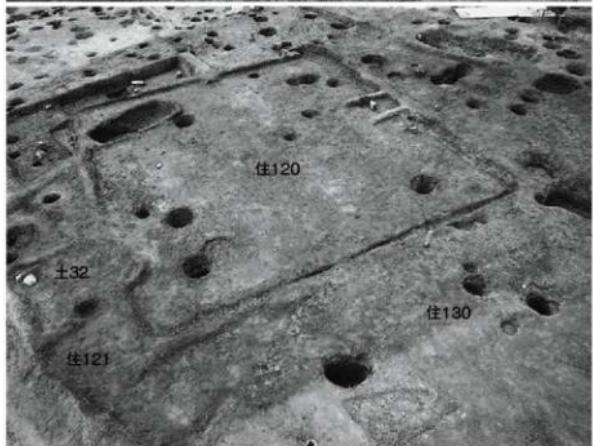


2 IV-B 区全景
(空中写真、上から)

図版2



1 IV-B 区基本土層（西から）



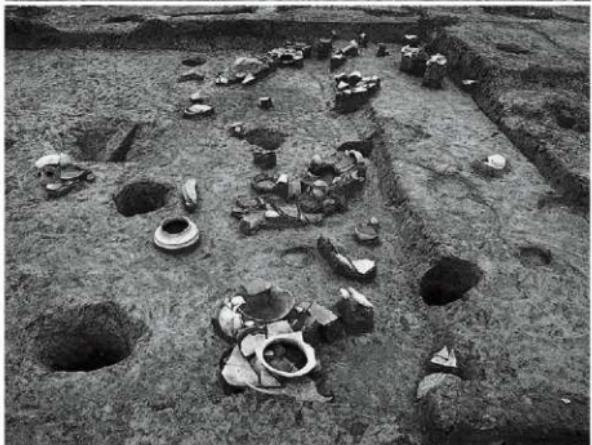
2 IV-B 区120・121・130号竪穴
住居跡、32号土坑（北東から）



3 IV-B 区120号竪穴住居跡
カマド（東から）



1 IV-B区122号竪穴住居跡
出土状況①(南西から)



2 IV-B区122号竪穴住居跡
出土状況②(東から)



3 IV-B区122号竪穴住居跡
炉跡(南から)



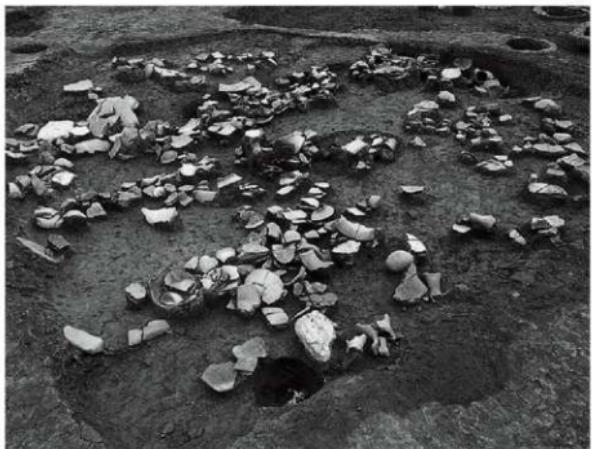
1 IV-B 区131号竪穴住居跡
(南から)



2 IV-B 区131号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 IV-B 区132号竪穴住居跡
出土状況① (南東から)



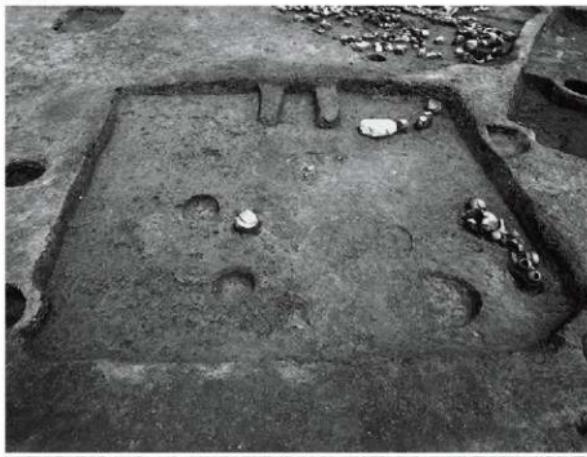
1 IV-B区132号竪穴住居跡
出土状況②（北西から）



2 IV-B区132号竪穴住居跡
屋内土坑（南東から）



3 IV-B区132号竪穴住居跡
完掘状況（南東から）



1 IV-B 区133号竪穴住居跡
(南から)



2 IV-B 区133号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 IV-B 区133号竪穴住居跡
出土状況 (西から)

1 IV-B区134号竪穴住居跡
(南東から)



2 IV-B区134号竪穴住居跡
カマド完掘 (南東から)



3 IV-B区134号竪穴住居跡
カマド断ち割り (C-C')
(東から)





1 IV-B 区137号竪穴住居跡
出土状況（北西から）



2 IV-B 区137号竪穴住居跡
カマド断ち割り (D-D')
(南西から)



3 IV-B 区137号竪穴住居跡
カマド断ち割り (I-I')
(南西から)



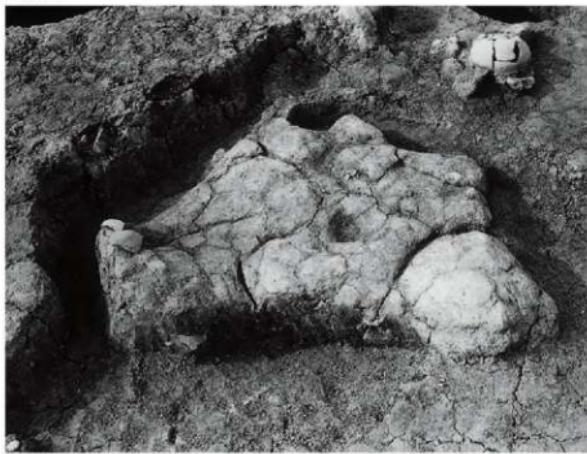
1 IV-B区138A・B号竪穴住居跡（北から）



2 IV-B区138A号竪穴住居跡カマド（北から）



3 IV-B区139号竪穴住居跡（東から）



1 IV-B 区139号竪穴住居跡
カマド検出状況（南東から）



2 IV-B 区139号竪穴住居跡
カマド完掘状況（南東から）



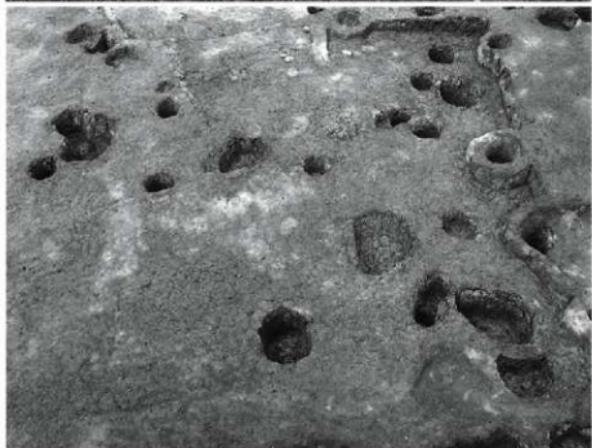
3 IV-B 区140号竪穴住居跡
付近（南から）



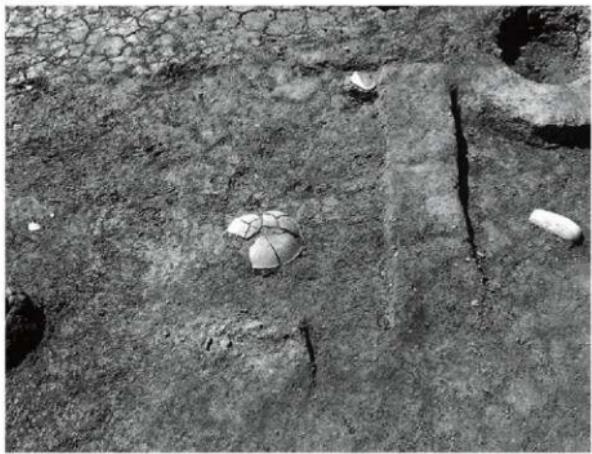
1 IV-B区140号竪穴住居跡
(南から)



2 IV-B区140号竪穴住居跡
カマド (南から)



3 IV-B区141号竪穴住居跡
(東から)

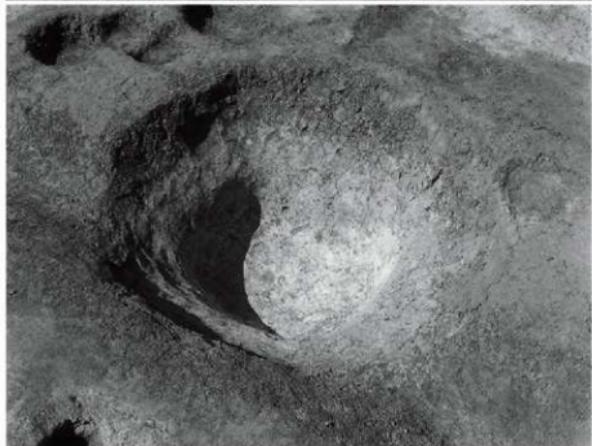




1 IV-B区143号竪穴住居跡
カマド完掘状況(東から)



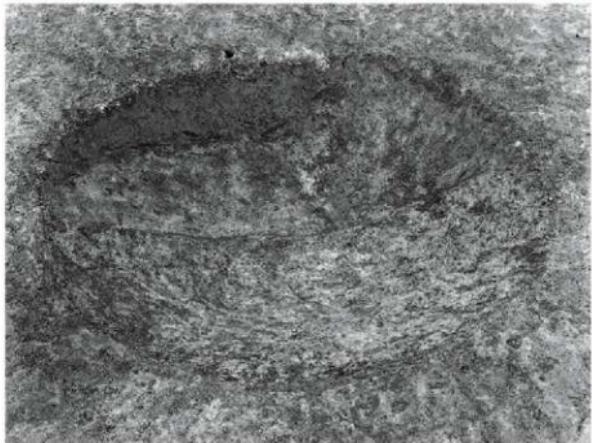
2 IV-B区144号竪穴
住居跡(南東から)



3 IV-B区31号土坑
(北東から)



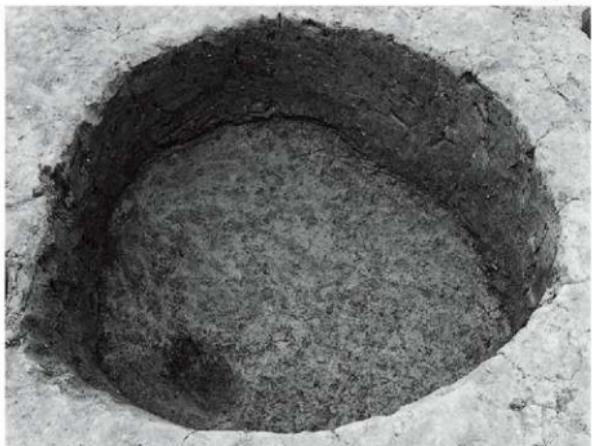
1 IV-B区33号土坑（西から）



2 IV-B区34号土坑（南から）



3 IV-B区35号土坑（南から）



1 IV-B区36号土坑
(東から)



2 IV-B区37号土坑
(南から)



3 IV-B区43号土坑
(南から)



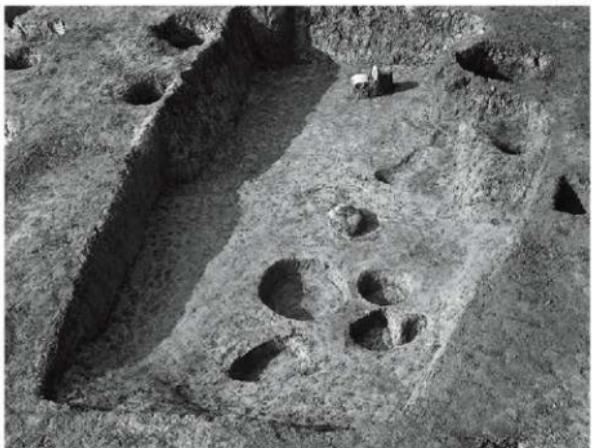
1 IV-B区45号土坑（東から）



2 IV-B区46号土坑（西から）



3 IV-B区47号土坑（北東から）



1 IV-B 区48号土坑
(南から)



2 IV-B 区48号土坑
出土状況 (南から)

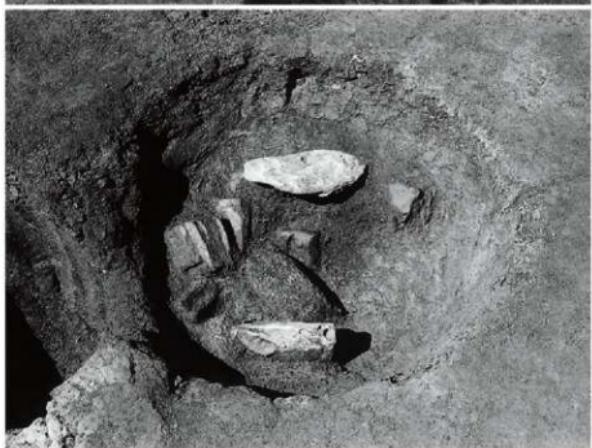


3 IV-B 区4号井戸
(南から)

図版18



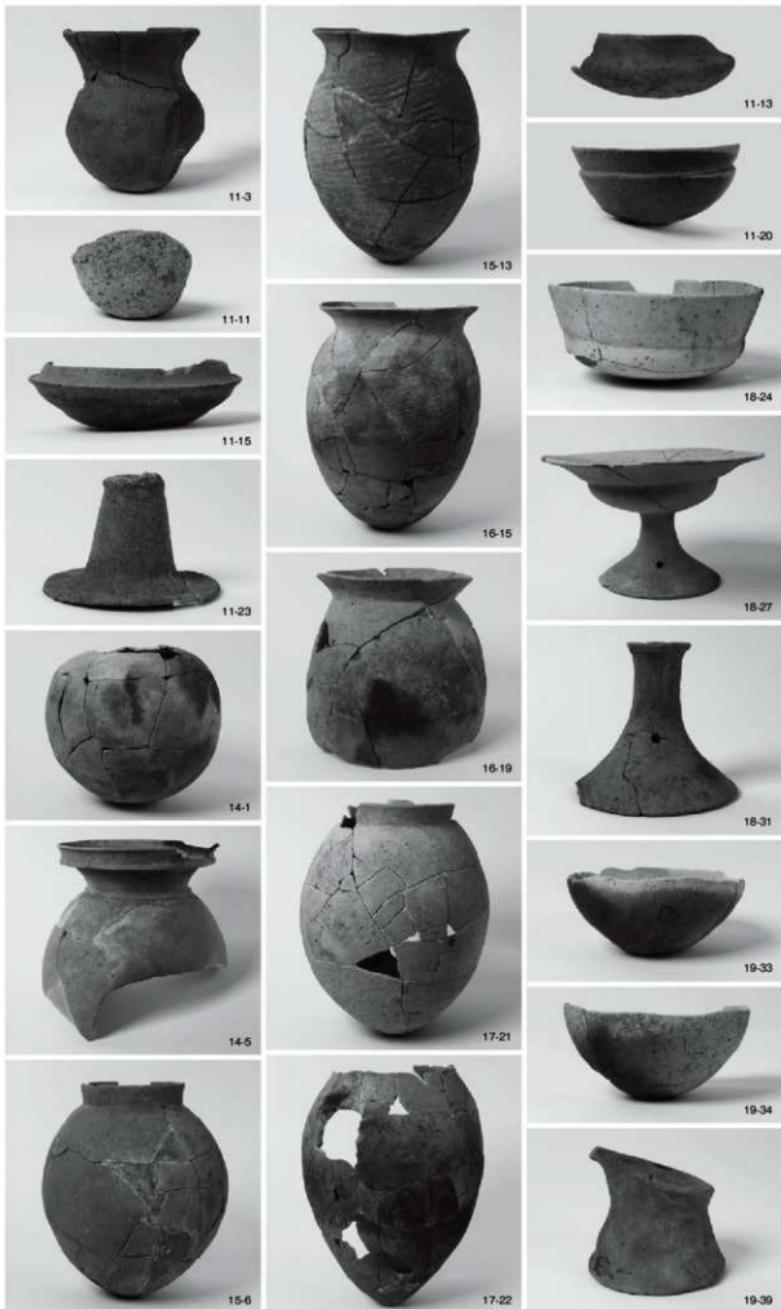
1 IV-B区SX01（南西から）



2 IV-B区P820（西から）

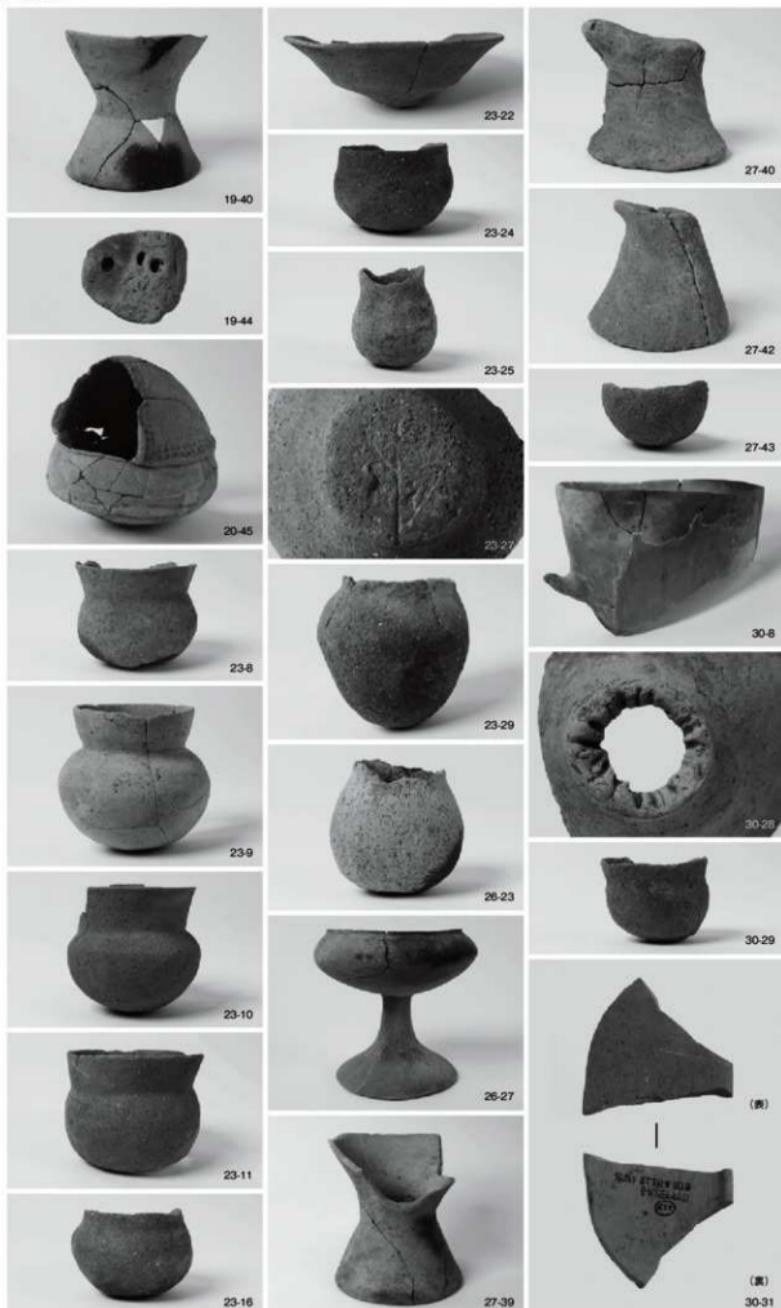


3 IV-B区P851（北から）

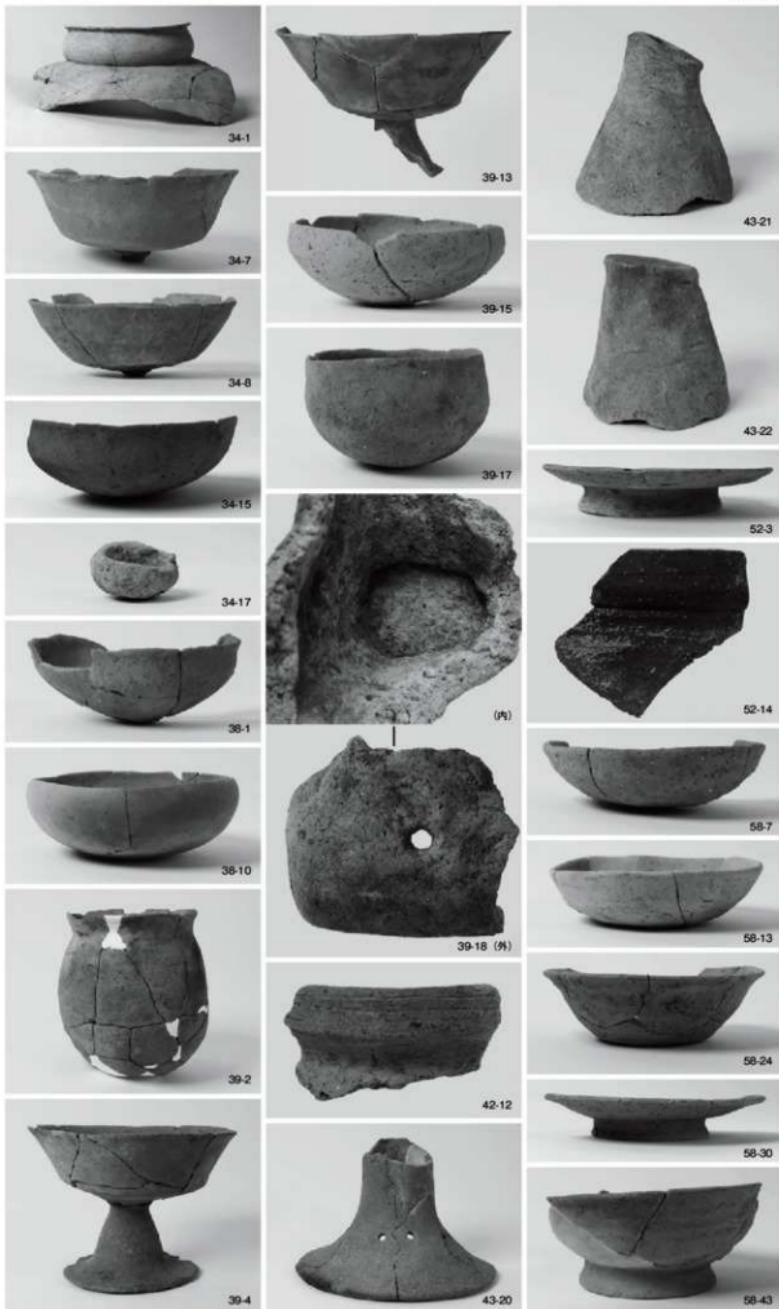


IV-B区出土遺物①

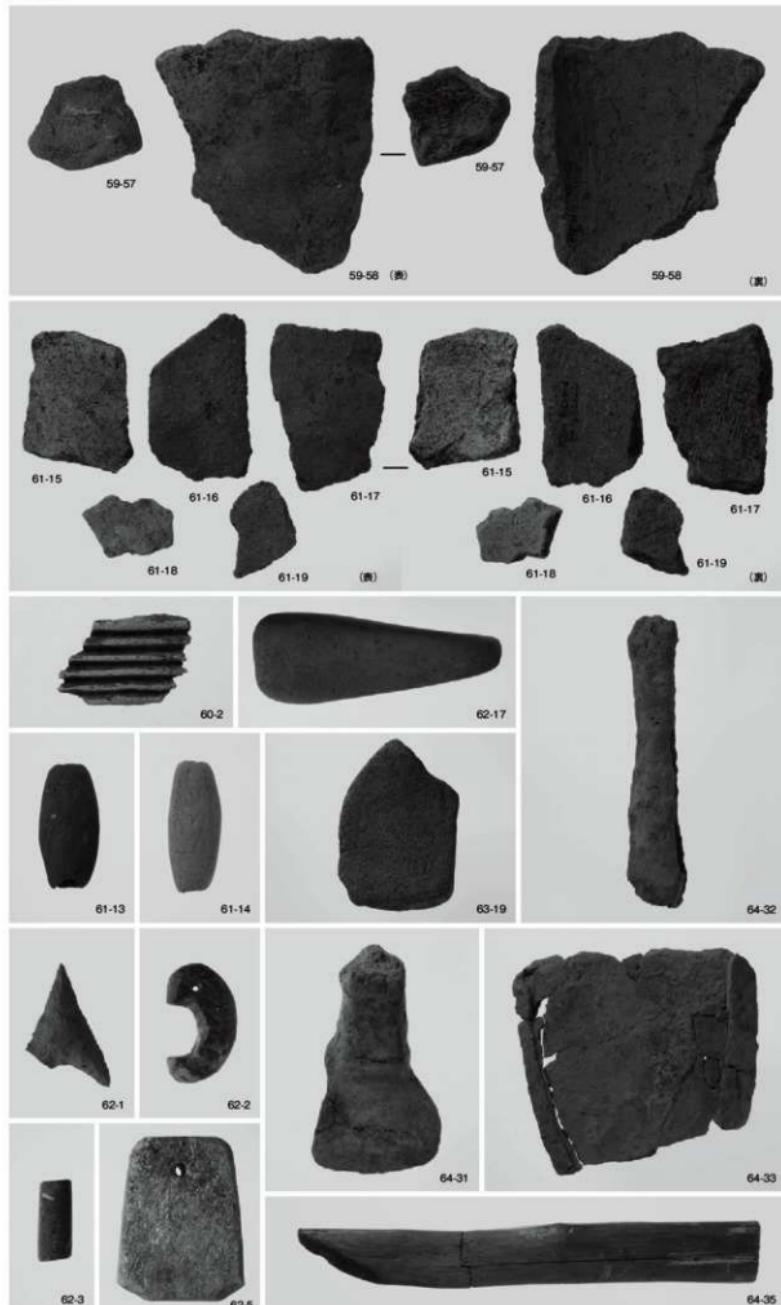
図版20



IV-B区出土遺物②



IV-B区出土遺物③



IV-B区出土遺物④



1 IV-C区東側全景
(北から)



2 IV-C区全景 (北から)



3 IV-C区全景 (東から)